NPO法人
横浜シュタイナー学園
シュタイナー教育を実践する小中一貫校

Newsletter

第 162 号
2023 年 12 月 27 日発行

12 月号は、p.1『山の学校』、p.3『奈良歴史旅行』、p.5『大航海時代の学びを終えて～７年生 ヨット体験～』、p.6『６年生による音楽劇「魔笛」』、p.7『２年生のアドヴェント』p.8『学期祭』のトピックでお届けします。

山の学校

5 年生担任　神田 ひとみ

10 月 3 日（火）、晴天に恵まれ、5 年生は全員そろって初めての宿泊学習「山の学校」へ出発しました。期待とうれしい気持ちでいっぱいの子どもたちは、お家の方たちに見送られながらマイクロバスで愛川ふれあいの村へ向かい、約 2 時間後に到着しました。

「山の学校」の最初の活動は高取山ハイキングです。ふれあいの村は高取山のふもとにあり、登山口はふれあいの村の敷地に接しています。

子どもたちは登山口に移動して、まずはヒル対策として足に塩水をスプレーしました。そうして、付き添いで来てくださったお父さんたちと西尾先生も一緒に 18 人で出発しました。高取山は標高 705 m ですが、登山道は急なところも多く思ったより大変なハイキングです。子どもたちは一歩一歩踏みしめて登りながら道端のきのこや珍しい植物を見つけて足を止め、足の長いクモを見て「クモだ、クモだ。」と声を上げ、楽しく登ることができました。「先生、あとどれくらいですか？」と時々尋ねられ、「う～ん、まだ半分も来ていないよ。」と答えると、後ろの方へ「まだ半分も来ていないんだって。」と私の言葉が伝達されました。何度か休憩を取りながら登り、誰一人くじけることなく頂上にたどり着くことができました。頂上に着いたとき、子どもたちは、そこから見える景色に目を奪われ歓声を上げました。青空の下に緑や町が広がり遠くまで見渡せました。

頂上でお弁当を食べ少しのんびりした後、展望台に登りました。すると、ふれあいの村とは反対の方角に森に囲まれた大きなダム湖が見えました。

全員で展望台からの景色を楽しんだ後、山を下り始めました。滑らないように気をつけなければなりませんでしたが、下りるのは登るよりも疲れないので、歌を歌いながら下りる子もいました。

下山後は、入村式と呼ばれるオリエンテーションがあり、その後、宿泊棟に移動しました。宿泊棟の周りは草地で高い針葉樹の木立があって、まるで森の中に来たようです。

宿泊棟「しらかば 3」に入ると、グループごとに部屋を確認し、エプロンや三角巾など炊事用の持ち物を用意して野外炊事場へ向かいました。自分たちで夕食のベジタブルカレーを作るのです。

班ごとに薪の担当、調理道具や食材を取りに行く担当を決めると、子どもたちは早速それぞれの物を受け取る場所へ歩き出しました。やる気に満ちた彼らは、ついつい急ぎ足になるようでした。

そうして、道具や食材、薪が炊事場に集まり、仕事が始まりました。特に、薪を組んで焚きつける仕事は重要です。苦労した子もいましたが、スタッフの方の手助けもあり、３つの班とも薪に火をつけることができました。

食材を小さめに切る仕事を黙々と行った子、使い終わった道具を洗う子、作業台を常に整えておこうとする子、つきっきりで火の番をする子、・・・それぞれの子が、自分がひき受けた仕事を行い班の友だちと協力できていたのが何より嬉しいことでした。

３つの鍋に多めにできたベジタブルカレーと鍋３つのご飯を見た時、私は、みんな食べてしまえるのだろうかと心配になりましたが、「いただきます」と食べ始めてしばらくすると、それはいらぬ心配だったことが分かりました。子どもたちは友だちが作ったカレーも食べたいと何度もお代わりをして、ご飯の鍋もカレーの鍋もすっかり空っぽになりました。

食事後は、すぐに片付けに取り掛かりました。煤で真っ黒になった鍋をたわしでこすって元通りピカピカにすること、かまどの灰や薪の燃え残りの片付け、かまどとその周辺をきれいに掃くこと、ゴミの片付け、調理道具の片付けなど、やることはたくさんありました。ですから、仕事が無いという子は一人もなく、全員が身体と手を動かし働きました。そうしているうちに、「秋の日は釣瓶落とし」あっという間に日

が沈み、片付け終わった時はもう暗くなっていました。

1日目の最後の活動はキャンプファイヤーです。

「しらかば3」の前にあるキャンプファイヤー場には、すでに薪が組まれてありました。それは、付き添いのお父さん方が、子どもたちが炊事をしている間に準備してくださったものでした。

「・・・緑豊かな山々　生き生きとした草木　美しい自然の中で　よい体験ができますように」

「これまで　わたしたちは、共に学び、働き、遊び、友情を育んできました」

「これからも　この友情がより深まっていきますように」

「一人ひとりが愛をもって行動できますように」

「勇気をもって正しい行いができますように」

「思いやりを持ち、みなで力を合わせることができますように」

「わたしたちは　愛　勇気　思いやりの灯を　心の中にともします・・・」

そうして、それぞれの班の子がトーチの灯で薪に点火しました。キャンプファイヤーの始まりです。

燃え上がる炎を囲み、子どもたちは「燃えろよ燃えろーよ・・・」と歌いながら炎の熱を感じ、光を見つめました。

それから、みんなで、付き添いのお父さん方も西尾先生も一緒に、リズムの時間に練習してきた歌を次から次へと歌いおどりました。

やがて、炎がだんだん小さくなると、『遠き山に日は落ちて』という歌を歌い、炎を見つめながらキャンプファイヤーを終えました。

このように、山の学校1日目の活動は、晴天のおかげもありすべて心残りなく行うことができました。

2日目は、朝、カーテンを開けると、草や木が静かに雨にぬれていて辺りが白っぽく見えました。（雨の中の活動は大変だなあ。）と思いましたが、幸いにも大雨にはならず合羽を着て歩くのもそれほど大変ではありませんでした。

最初の活動は、ふれあいの村のスタッフの方のご指導による、バードコール作りでした。鳥の鳴き声のような音が鳴るバードコールが出来上がると、子どもたちはそれにひもをつけ首から下げてキュッキュッと音を鳴らして楽しみました。そして、「春、親鳥たちがひなを育てる時期には決して使わないように。親鳥が自分のひながどこにいるか分からなくなるからね。」というスタッフの方の話をしっかり心に留めているようでした。

バードコール作りの後は、スタッフの方に挨拶をしてふれあいの村を出発しました。

次はバスで半原へ向かい、機織りの体験です。手仕事の時間にダンボールの板を使って行った織物を、初めて機織り機を使って行うのです。機織りの部屋に通されて、縦糸と横糸が準備された機織り機を見たとき、子どもたちはきっとわくわくしたにちがいありません。そして、レインボープラザの方から機織り機の使い方や横糸の通し方を教わりながら、一段一段気をつけて織っていきました。出来上がったものはたいへん美しく、皆、満足した様子でした。

それから、また傘をさしたり合羽を着たりしてあいかわ公園へと歩き出しました。公園に着くと、公園施設の方のご厚意で、建物の中でお弁当をいただくことができ本当に助かりました。そうして、ほっと一息ついた後、今度はダムの放流見学に向かいました。15分くらい歩いてダムに着くと、橋の上で放流が始まるのを待ちました。しばらくして、放流開始を告げるアナウンスが流れ、「いよいよだ」と皆、水の出口を見つめました。すると、音とともに水が流れ落ち始めました。透明なはずの水が白く模様を描きながら流れ落ちてきます。その水の流れの美しいこと。子どもたちは、すっかり見とれていたようです。

6分間の見事なダムの放流を見た後、私たちは展望台へ行きました。そこには、ダム建設当時の様子が写されたパネルが展示されていました。「このダムのある辺りには、昔、村があって人々がくらしていました。」という話を聞いた子どもたちは熱心にパネルを眺めていました。そして、「『反対』って書いてある。」と、当時ダム建設に反対した人々もいたのだということを知りました。今、私たちはダムの恩恵を受けていますが、その建設のために愛する故郷を失った人々がいたのです。子どもたちの心にはどんな思いがうかんだのでしょう。

展望台の建物を出て、再びあいかわ公園へ戻ると、最初に見えたのが「風の丘」という小さな丘です。その丘に登ると、辺りに遮るものがなく風が通るのを感じます。そして、少し離れたところに山が見え、思わず「ヤッホー」と叫びたくなります。案の定、子どもたちは（大人たちも）、「ヤッホー」と叫びました。すると、とてもはっきりとやまびこが返って来るので、皆、嬉しくなって心行くまで「ヤッホー」「ヤッホー」と繰り返しました。

「山の学校」で子どもたちが楽しみにしていたことがもう一つありました。それは、「冒険の森」というアスレチックができる場所で遊ぶことでした。この時、雨は上がっていましたが、遊具が濡れていて、遊ぶのは危険です。それでも、子どもたちは、何とか遊べるのではないかとあきらめきれません。「先生、冒険の森に行きますか。」と聞かれるたびに、「行かないよ。」と答えていましたが、駐車場への通り道だったのでその場所に行ってみました。すると、冒険の森の入口に「本日は終了しました。」という看板があり、子どもたちはようやくあきらめがついたようでした。

帰りのバスへ向かう途中、後ろから「また冒険の森にみんなと来て遊びたいなあ。」という子どもたちの声が聞こえてきました。その言葉に私は微笑まずにはいられませんでした。最後に、子どもたちにとって充実した楽しい「山の学校」となり私もほっとしました。

奈良歴史旅行

6年生担任　小林 裕子

6年生は10月30日から2泊3日で奈良へ歴史旅行に出かけました。5年生から学び始めた日本の歴史の中で、その初期に政治が行われた飛鳥時代、奈良時代。子どもたちにとっては、まだ現実味のない物語の世界です。けれども、実際にその地を旅することは、本当に聖徳太子や蘇我氏、天智天皇、天武天皇がこの地に生きていたことを感じ、思い描くことができる生き生きとした学びの機会でもあります。

出発前、各自、自分が調べたい寺や神社、仏像などについて、絵を描き文章をまとめて歴史旅行の資料としました。そして1週間くらい前になると、「早く行きたいなぁ。」という言葉が毎日のように聞こえてきました。けれども、発熱する子どもが2名出て、私のほうはみんなで一緒に行けるのかと、内心ハラハラしていました。

出発の日、集合時刻は早朝でした。後日、子どもたちの作文を読むと、朝起きられるか心配だったという子どもが何人かいたり、忘れ物がないかと何度もリュックの中を見たという子どももいて、やはり緊張していたんだなぁと思いました。新横浜駅まで家の人たちから見送ってもらい、子どもたちは意気揚々と出かけました。さすがに6年生、親御さんと離れるのが寂しいといった雰囲気はありませんでした。（でも内心はわかりません。）早朝の新幹線でしたので、眠っている人もいるから始めは静かにしよう、と事前に言ってありました。ところが、新幹線に乗り込むやいなや、それぞれの手には許可したトランプが握られていて、いつ始めてもよいように、準備している子どもたちには驚きました。「もう少し待とう。」といい、8時までは静かに待ちました。とはいえ、8時近くになると、再びトランプをもって開始する体勢になり、8時ぴったりに遊び始めたのには、恐れ入りました。そして京都駅到着。それから近鉄線に乗って飛鳥の地へと向かいました。

京都駅から飛鳥駅までは時間がかかったものの、子どもたちは疲れも見せず飛鳥駅に到着しました。そこでレンタサイクルを借りて、天武、持統天皇陵や飛鳥寺、亀形石造物、石舞台、亀石、高松塚古墳の壁画館などを見て回りました。お天気もよく、秋の風もさわやかで気持ちのよいサイクリングとなりました。飛鳥は、日頃子どもたちが見慣れている高い建物もなく、のんびりとした空気が漂い、ここに本当に都があったのかと感じた子どももいました。飛鳥寺では、火災にあった三体の仏様のうち、両脇の仏様は焼失したものの、真ん中にあった飛鳥大仏は残ったという話を聞き、なぜなんだろうと不思議がっていました。その近くにある蘇我入鹿の首塚をみて、首がここまで飛んだのは本当かと口々に話していました。亀形石造物の見学では、お話が聞けることはめったにないようなのですが、石造物について詳しい方がたまたまいらっしゃって、お話を聞くことができました。それから石

舞台に行くと、想像以上の大きさに驚いていました。子どもの感想に、「やっぱり本物を見たほうがいいなぁと思った。」という言葉は、大事なことをついているような気がしました。そこでは、近くの飛鳥小学校の6年生たちがボランティア活動を行っており、石舞台についてのクイズを出してくれました。高松塚壁画館では、四神の壁画や石棺のレプリカをみて、古墳というものが少し想像できたかと思います。それぞれの見学先には、たいていスタンプが置いてあり、子どもたちは必ず全員がスタンプを押していました。

それから奈良駅につくと、駅前の小さな行基像を見ました。弾圧されながらも布教活動を行い、貧しい人を助け、社会事業を行った行基。人々の信頼も厚く、やがて朝廷にも認められ、さらには東大寺大仏建立の協力を求められ尽力した行基の話をもう一度しました。

そして、ようやく宿泊先の大仏館に到着。みんなどんな旅館なのか気になっていたようでした。

今の子どもたちは素敵な旅館やホテルに泊まることが多いことでしょう。でも、やっぱり修学旅行は、家庭的な雰囲気のある旅館がいいな、と私は思いました。お風呂に入って、みんなリラックスした様子となり、男の子も女の子もパジャマに着替えていましたが、それが普通で、気にする様子もないので、やっぱり小学生だなと思いました。そして、待ちに待った夕食です。お膳の中のおかずを見ながらおしゃべりしてはよく食べていました。ほぼ全員、食事の度に、おかずのお皿がきれいに空になっていたのには感心しました。みんなよく食べました。毎日おなかもよくすいたのかもしれません。夕食後は、一部屋に集まって遊びながら過ごしていました。寝る時刻になって部屋を回り「お布団には入ってください。」と言っても、なかなかおしゃべりが止まらない部屋もあったようです。また、夜中におなかがすいて目が覚めた、という子どももいました。食後「あぁ、おなかがいっぱい。」と言っていたのに。

二日目は、早朝の散歩から始まりました。疲れて起きられない子どもはいないかと気になりましたが、みんな元気でした。宿は、興福寺の裏にあり、春日大社にも近いところで、散歩していると、シカが現れます。始めはこわごわと近寄っていた子どもたちでしたが、すぐに慣れたようで、もう帰ろうと声をかけても、なかなかシカから離れようとしませんでした。

朝食後、早めに東大寺へと出発しました。そのためか、観光客は少なく、子どもたちは早速シカせんべいを買って、参道でゆっくりとシカと戯れていました。出発前から、おこづかいは少ない。お土産は買いたい。シカせんべいも買いたい。どうしようか、お金を出しあおうかなどと話していました。

それから、東大寺南大門の仁王様の迫力を大いに感じ、想像以上だったのは、大仏の大きさだったようです。その後、東大寺で買い物をした子どもが、お金が足りないと心配そうに言い始めました。この日は、グループで買い物に行く日だったので、子どもにとっては心配なことでした。けれども、カバンの中にお金が落ちた可能性が高く、一旦私がお金を貸す、ということで安心したようでした。二月堂からは、奈良の街並みがよく見えました。法華堂、若草山を左に見て春日大社へと歩いて行きました。それからバスに乗って平城京へ。平城京跡は、以前と比べ様々な施設が造られ、復元された遣唐使船も見学しました。また長屋王邸跡から発掘された様々な木簡も展示され、当時の人びとの生活がよくわかりました。平城京跡には、色鮮やかな朱雀門だけでなく、美しい大極殿も復元され、今現在も新たな建物が建設中です。当時、異国の人びとも行き交ったという広い朱雀大路は、暑さのせいもあったのか、子どもたちにとっては、少々歩き疲れる所だったようです。けれども、この想像力を駆り立てる平城京跡に、またいつか行ってみたいと思う子どももいたのではないかと思います。昼食は、芝生の上で柿の葉ずしを食べました。柿の葉ずしは美味しかったらしく好評でした。そして再び奈良市内へ戻り、有名な興福寺の阿修羅像や千手観音を拝観しました。千手観音の手の多さに驚き、本数を数える子ども、手に何を持っているかじっとみている子ども。もしかしたら、千手観音は初めて見る仏様だったかもしれません。そして、お待ちかねのお買い物。グループでの自由行動です。お店の人が奈良の言葉で気さくに話しかけてくれたことが嬉しかったという子どももいました。決められた金額の中でお買い物をするのは、なかなか難しいものです。きっと悩みながらお土産を買ったことでしょう。ほとんどの子どもは、最終日にはすべてのお金を使い切って上手にお買い物をしていました。「お金がすぐ無くなるのが悲しかったです。」と作文に書いた子どももいました。お金の価値、家族のありがたみを感じたとことと思います。そして、みんな、家族の喜ぶ顔をみたいという思いで、一生懸命買い物をしたと思います。

最終日。朝の散歩の後、バスに乗って唐招提寺、それから法隆寺へと向かいました。幾多の困難を乗り越えて、日本にわたり、母国、唐に帰ることのなかった鑑真。そんな話も思い出されたのでしょうか。唐招提寺の印象が強く残っていたようでした。美しく緑あざやかなコケも心に残ったようでした。法隆寺では、五重塔などを見学し、おなかがすいた上に、玉砂利の道を歩くので、まだ歩くの、という声も聞こえました。そして、ようやく柿うどん（彼ら曰く、ちょっと微妙な柿うどん）でおなかを満たし、少し甘いものを食べて元気を取り戻していました。帰りの新幹線の中で、疲れて眠る子どもがいるのでないかと思いましたが、誰一人眠らずにカードで遊んでいました。けれども、家に帰ってから眠り続けた人も何人かいたようで、やはり３日間の疲れがでたようでした。改札口を出ると、子どもたちは、小走りで家族のもとへと戻っていきました。

親元を離れた３日間は子どもたちにとって、たくさんの貴重な体験があったことでしょう。

みんなが元気に、無事に旅行ができたことは私にとっては何よりでした。また奈良に行ってみたいと思った子どもも何人かいて、日本の文化を肌で感じ、歴史を少しでも感じられた旅になったのではないかと思います。

大航海時代の学びを終えて～７年生 ヨット体験～

７年生担任　伊藤 雅子

７年生になると、子どもたちは世界史で大航海時代を学ぶ。『海の果ては大きな滝になっていて、その先は真っ逆さまに奈落の底へ落ちてしまう。』『遠くの海や見知らぬ国には見たこともない怪物が住みついている。』そんな風に思う人々も多くいる中、未知なる外国やその航路を開拓するには、とてつもなく熱い思いと、強い意志、そして的確な判断力が必要とされたことだろう。15 世紀の冒険家たちが、たくさんの年月をかけ、危険を冒し、不安に駆られながらも諦めずに、信念をもって進んだ先に新大陸を見つけた時の喜びはどんなにか大きかったことか。

13 歳前後の子どもたちの意識はまさにこの時代の段階にやってきたと言える。安全で安心できる世界を飛び出し、自分で新しい発見をし、新境地を見つけたい、という気持ちが芽生えるこの年齢の子どもたちは、身を乗り出すようにしてこのエポック授業を受けた。コロンブスやバスコ・ダ・ガマの人生に耳を傾けながら、その思いや行いを想像しては、目を輝かせたり、顔をしかめたりしながら学びを進めた。そして、その学びを終えたころ、この全員で大海原へと漕ぎ出すことを提案すると、歓声が沸き起こり、満場一致で決行が決まったのだ。

そうして、うららかな秋空広がる 11 月 2 日、私たち７年生は胸を躍らせて江ノ島のヨットハーバーに足を運んだ。そこには約 60 年前に作られ、今も現役で海上を走る木造帆船『やまゆり』が私たちの到着を待っていた。

そして、19 人の子どもたちと私を乗せた『やまゆり』は軽快に海へとすべり出す。どこまでも広がる青い空と青い海、遠くに見える水平線。右側には丹沢の山並み、左側に鎌倉から三浦半島へと続く岸を眺めながら、陸地から沖へと進む船の上で、みんなの笑顔が広がる。モーターを止めて帆を張ると子どもたちから「わぁ～！」と歓声が上がった。風を受けて帆がはらむのを見上げる顔にお日様の光が当たってキラキラとまぶしい。

ヨットの先端に腰を下ろして風を全身に受け、満面の笑みを浮かべながら、船長さんやクルーの方が教えてくださる船の仕組みのお話にも興味深く耳を傾ける子どもたち。船の下には大きなフィンがついていて、舵をきるとそれが左右に動くことで方向づけられると聞き、試してみたくてうずうずしている様子が手に取るようにわかる。船長さんもそれを感じ取ったのだろう。「やってみるか？」と声をかけてくださり、子どもたちは待ってましたとばかりに「はいっ！」と元気な声を返す。瞳を輝かせ、真剣な表情で舵をとって船を操縦する子どもたちを見ていたら、ちょうど 13 歳のころ海に強いあこがれをもっていた若き日のコロンブスの目の輝きも同じようだったかもしれないな、と思った。

今まで浜からしか見たことがなかった烏帽子岩の間近で見る大きさに驚き、釣り人に大きく手を振る子どもたち。その一方で岩場近くを操縦している子の表情には緊張感が漂う。手元のモニターで水深に十分注意を払いながら舵をきらなくてはならないからだ。海底の様子は上からではわからないので、このモニターがない時代には座礁する危険とも隣り合わせだっただろう。車や自転車と違って、ハンドルをきってすぐに方向が変わるわけではないので、時間の誤差で船が何度も左右に揺れる。

手元に正確な地図やモニターがなかった時代、何週間もの間、どの方向にも陸地が見えなかったら、さぞ不安でいっぱいになっただろうと想像する。悪天候や、船酔い、体調不良があればなおさらだ。

そんな考えに浸っている間に船は方向転換をして、みんなで鎌倉側へと視線を移す。腰越、稲村ケ崎、由比ガ浜、材木座と逗子方面にしばらく進み、海から鎌倉全体を眺める。なるほど、背後からは山々に抱かれ、表は海に面していて、攻められにくい町だということがよくわかる。鎌倉時代の学びを目前にして海側からの全景を見られたのもよかった。

操縦を代わりながら、３時間はあっという間に過ぎ、江ノ島ヨットハーバーへと戻る時間となった。心配した船酔いもなく、みんな笑顔で下船して「楽しかった。」「また乗りたい。」という声がたくさん聞かれた。

下船後は避難塔も使っての大鬼ごっこ。「今日のところは江ノ島の裏側にある洞穴に行くのは無理だね。お参りだけして駅に向かうよ。」と話して江ノ島神社に参拝。さあ、帰ろうという時になって数名が行方不明に。そう、勢いづいて洞穴に向かった子たちが数名いたのだ。しばらくの後、嬉しそうに息を切らして戻ってきて、ただならぬ気配を感じて肩をすくめる行方不明者たち。「何故だかわからないけれど『洞穴に行かない』ということ忘れちゃいました。」と言う彼らに、怖い顔をつくってお説教しながらも、「こういう人たちが、新しい未来を切り開いていくのかもな。」なんて考えがよぎ

り、緩みそうになる頬っぺたをおさえた。
　ふと昨年６月に課外授業で出かけた時のことを思い出す。親ガモの後ろをぞろぞろついていく子ガモたちに遭遇した際、引率の先生が「伊藤クラスみたい。」と言って笑っていたのだが、もはや今、伊藤クラスの子ガモたちはお母さんの存在を忘れて、外へ外へと気持ちが向くのだなぁ、と痛感した。
　広い世界に出てゆくことを喜び、囲いを広げつつも、まだまだ目は離せないな、と気を引き締め、お母さんガモは子どもたちの動向に目を光らせながら帰路についたのだった。

６年生による音楽劇『魔笛』

音楽専科教員　伏見 あかね

♪だーれもがしってる　天才作曲家　その名はー
ヴォルフガーング　アマデウス　モーツァルト♪
　12 月 1 日（金）、6 年生の子どもたちの高らかな歌声が、十日市場校舎オイリュトミー室内に響き渡りました。
　世界中の多くのシュタイナー学校で、6 年生が取り組むモーツァルトの音楽劇『魔笛』K.620 は、横浜シュタイナー学園でも、1 期生の頃から毎年上演してきました。
　大蛇に襲われる王子タミーノ、鳥を捕って暮らしているパパゲーノ、世界を闇で征服しようと企む夜の女王、その娘パミーナ、偉大な司祭ザラストロ、弁者、僧、老婆に扮したパパゲーナなど。様々な個性を持つ登場人物のやりとりが面白いストーリーに、モーツァルトの軽快な音楽がなお一層物語を面白くさせています。
　1 期生の時は、シンプルな劇遊びのようなものだったのですが、年々場面や音楽、保護者の方に作っていただいた衣装が増えていきました。そして今回、14 期生による魔笛は、場面は 7 場面まで増え、登場人物も充実してきました。
　6 年生は、音楽の授業でモーツァルトについて学ぶ中で、少しずつモーツァルトの人物像を描いていきました。毎年思うのですが、子どもたちは、モーツァルトの生い立ちを知り、モーツァルトのことが好きになります。そして彼の代表作である『魔笛』と出会います。僅か 35 年の生涯で、亡くなる年 1791 年に作曲し終えた作品であること。天才、神童、と言われ続けた幼少期とは全く異なり、借金まみれになって病苦により亡くなったモーツァルトの哀れな最期。しかし彼の音楽の軽やかさ、美しい旋律、美しい和声。一度聴けばすぐに覚えて、いつのまにか口ずさんでいる。
　12 月 1 日は、十日市場校舎の 7 、 8 、 9 年生が観劇しました。上級生たちはすでに上演した演目なので、懐かしく思い出し歌ったり、新しい場面を楽しみにしたり、6 年生たちに励ましの声をかけてくれたり、とても良い雰囲気で本番を迎えられました。
　劇が始まり、初めは緊張気味だった 6 年生たちも、7 、8 、9 年生の先輩たちが、笑ったり感心したり、とても反応良く観てくれたので、次第に気分がのってきました。体調不良のためお休みとなったクラスメイトの担っていた役は、急遽子どもたちで相談し、代役で劇を進めることができました。お互いを尊重し、知恵を出し合い、いざという時に助け合えること。劇や合奏に取り組むことは、出来栄えばかりが重要ではなく、練習を重ねる中で出てくる問題や課題を、みんなでどのように助け合って創りあげていくかが大切だと思っています。それはその都度その都度、確認してきたことであり、これからもずっとそうであらねばならないのですが、彼らの中に育っているものを垣間見られ、とても嬉しくなりました。それが大きな贈り物だったと思います。
　劇の後は、合奏の時間。このクラスはヴァイオリンを弾く人が 7 人いるので、ピアノ、ソプラノ笛、ヴァイオリンの編成で、『魔笛』の中からのよく知られたアリアや、モーツァルトの代表的な作品を演奏しました。モーツァルトの音楽にまっすぐ向き合い、懸命に音を重ねあう 6 年生たちの姿は、とても美しいものでした。

２年生のアドヴェント

２年生担任　大脇 聡史

クリスマスを迎えるまでの４週間、「待降節」とも言われるアドヴェントの季節は、１年で最も日照時間が短い、冬至に向かっていく時期と重なります。学園ではこの季節に、暗くなっていく世界と対比するように明るさを増していく、自分の内なる光に目を向ける祝祭や行事を行います。

★ニコラウスが来た日

12月６日、エポック授業の終わり間際、２年生教室の扉が「ドン！ドン！」と勢いよく叩かれました。子どもたちがざわつく中、担任がおそるおそる扉を開くと、そこには大きな麻の袋が置かれていました。何人かの子どもたちは既に自分の席から立ちあがらんとするばかりの興奮です。

「６・・・、３・・・・、８・・・・」

数字が無造作に書かれた紙袋を麻袋から取り出し、廊下から運び入れた長机の上に並べていくと、全部で９つの袋が出てきました。紙袋の中にはそれぞれ、星形のクッキーがたくさん入っています。

「ニコラウスだー！」

袋の中身を知って、昨年の２年生がニコラウスのクッキーを持ってきてくれたことを思い出したのでしょう。プレゼントを持って来た主がわかり、教室は歓喜に包まれました。

エポック授業の１つのテーマとして、聖人の物語を聴き、簡単な文章を書いたり絵を描いたりしながら体験を深めていく２年生では、この時期に「聖ニコラウス」の物語を聴いています。聖ニコラウスはキリスト教の聖人で、サンタクロースのモデルになった人物でもあります。物語の中でニコラウスは、仲間とともに荷車を引いて、姿を見られないようにしながら、貧しく飢えた人々の家の玄関先に穀物が入った袋を置いてまわります。

「袋に数字が書かれているね。１から９まであります。これはきっと、１年生から９年生までの分ということだね。２年生が配ってくださいってことかな。」

こうして、４つのグループに分かれ、それぞれ１年生と９年生、３年生と８年生、４年生と７年生、５年生と６年生にクッキーを届けることにしました。

「手紙を書きたい！」

何人かの子から声が上がりました。

「そうだね、手紙を添えて届けましょう。」

各グループで相談して、分担して書くことにしました。手紙には《○ねん生のみなさんへ　ニコラウスからクッキーがとどきました。　２ねん生より》と書き、季節の絵として黒板に描いてあったりんごろうそくの絵や、クラスメイトの一人がお母さんと一緒につくって持って来てくれたリースの絵を添えた人もいました。

昼食の時間、いよいよクッキーを配る時がやってきました。まずは霧が丘校舎の１～５年生、それから十日市場校舎の６～９年生の教室に、グループごとに訪ねていきました。１年生はまだ経験していませんが、３年生以上はみんな２年生の頃に同じ経験をしているということもあり「ニコラウスが来たの？」などの質問を交えつつ、温かく迎えてもらったようです。

11月のマルティン祭に続き、この日も、喜びを分かち合う嬉しさを経験できました。また、他の誰でもない自分たち２年生が全校にクッキーを届けるということで、とても誇らしそうな表情を見られたのも印象的でした。

★２年目のりんごろうそく

ニコラウスのクッキーが届いたのと同じ週の金曜日、祝祭「アドヴェントの庭（りんごろうそく）」が行われました。２年生の子どもたちにとっては２回目で、最後のりんごろうそくです。

夕方、これから暗くなる頃に学園に集まり、真っ暗に設えられたオイリュトミー室でこの静かな祝祭を行います。部屋の中にはモミの枝を敷いて作られた渦巻きがあり、中心に１本だけ“天の火”の蝋燭が灯されています。

沈黙の中、保護者と兄弟姉妹、そしてクラスの子どもたちが揃うと、天の火を初めて地上にもたらした天使たちのお話が静かに語られます。お話が終わると、まずは担任が、それから生まれてきた順番でひとりずつ、大切に両手でりんごろうそくを持って、渦巻きの中に歩いていきます。

暗い中をひとりきりで歩いていくことは、外見以上に心許なく感じられるものです。それでも一歩ずつ進んでいくと、やがて中心に灯る天の火の蝋燭に辿り着きます。そしてそこで持っていたりんごろうそくに火を灯すと、たった１本の小さな蝋燭の明かりが加わっただけにも拘らず、驚くほど部屋全体の明るさが増します。そうして１本、また１本とりんごろうそくに火が灯り、それがひとつずつ渦巻きのなかに並べられていきます。

全員が火を灯し終える頃には、一人ひとりの顔がよくわかるくらい明るく、部屋の中が照らされていました。

しばらくの間、何の音もしない中で、みんなでただ渦巻きの上に灯ったりんごろうそくの明かりを見つめます。ただ黙って、その明かりを見つめている時間と空間の中には、言いようのない安心感と美しさがありました。

子どもたちがりんごろうそくに灯した“天の火”は、私には、子どもたち一人ひとりがこの世界に携えてきた希望や使命と重なって感じられました。一つずつの明かりは決して大きくないけれど、それが集まるとこんなにも明るく温かく感じられるのだと、言葉ではなく体験として得られたことは、きっと暗い冬の時期を、そして子どもたちがこれから歩んでいく人生を、明るく温かく照らしてくれるでしょう。

2 学期　学期祭

12 月 14 日（木）青葉公会堂

横浜シュタイナー学園では、一学期ごとに広い会場を借りて各学年の日ごろの学びを披露する会を行っており、1、2 学期末に行うものを「学期祭」と呼んでいます。低学年から順々に身体が大きくなっていき、発表内容も学年相応に変化していく様子を教員、保護者、子ども同士が見合うことで、学園全体の気持ちが一つになる大切な行事です。

1 年生　リズムの時間より

2 年生　オイリュトミー
音楽　ロイプケ「星のバラード」
言葉「家のねずみとのはらのねずみ」

3 年生　オイリュトミー
ゲーテ「呼吸の中には 2 つの恵み」
ディアベリ「ヴィヴァーチェ」
チャイコフスキー「くるみ割り人形」
ブルグミュラー「アヴェ・マリア」

4 年生　リズムの時間より
鞠つきと詩

5 年生　オイリュトミー
音楽 シューマン「急げ！」
言葉「ペルシアの時代の言葉」

6 年生　英語の歌
”Land of the Silver Birch,”
”My Paddles Keen and Bright”

7 年生　ジャグリング

8 年生　英語の歌と詩
”Deck the Hall,”
”Sixty seconds make a minute”

9 年生　歌 : クリスマスの歌
詩 :「三人の親子」千家元麿

合同合奏　大地讃頌
One little candle

横浜シュタイナー学園　～ Newsletter 第 162 号～
2023 年 12 月 27 日発行

編集：広報の会
発行：NPO 法人横浜シュタイナー学園
https://yokohama-steiner.jp
〒 226-0016 横浜市緑区霧が丘 3 丁目 1-20
TEL　045-922-3107
※ 掲載内容の無断転載をお断りします